

ヨハネ 16:16-24 ¹⁶ しばらくするとあなたがたは、もはやわたしを見なくなります。しかし、またしばらくするとわたしを見ます。¹⁷ そこで、弟子たちのうちのある者は互いに言った。『しばらくするとあなたがたは、わたしを見なくなる。しかし、またしばらくするとわたしを見る』、また『わたしは父のもとに行くからだ』と主が言われるのは、どういうことなのだろう。¹⁸ そこで、彼らは、「しばらくすると、と主が言われるのは何のことだろうか。私たちには主の言われることがわからない」と言った。¹⁹ イエスは、彼らが質問したがっていることを知って、彼らに言われた。『しばらくするとあなたがたは、わたしを見なくなる。しかし、またしばらくするとわたしを見る』とわたしが言ったことについて、互いに論じあっているのですか。²⁰ まことに、まことに、あなたがたに告げます。あなたがたは泣き、嘆き悲しむが、世は喜ぶのです。あなたがたは悲しむが、しかし、あなたがたの悲しみは喜びに変わります。²¹ 女が子を産むときには、その時が来たので苦しみます。しかし、子を産んでしまうと、ひとりの人が世に生まれた喜びのために、もはやその激しい苦痛を忘れてしまいます。²² あなたがたにも、今は悲しみがあるが、わたしはもう一度あなたがたに会います。そうすれば、あなたがたの心は喜びに満たされます。そして、その喜びをあなたがたから奪い去る者はありません。²³ その日には、あなたがたはもはや、わたしに何も尋ねません。まことに、まことに、あなたがたに告げます。あなたがたが父に求めることは何でも、父は、わたしの名によってそれをあなたがたにお与えになります。²⁴ あなたがたは今まで、何もわたしの名によって求めたことはありません。求めなさい。そうすれば受けるのです。それはあなたがたの喜びが満ち満ちたものとなるためです。

◆ イエスの弟子たちへの結びの言葉

- ・ イエスが、決別説教の最後に弟子たちに一番伝えたかったことは何か？
- ・ 「まことに、まことに」が二度出てくるが、そこにイエスが弟子たちに言い残したかったことが記されている。

◆ 「しばらく」と「しばらく」(16) の間に起こる重要な出来事

- ・ しばらくするとイエスを見なくなるが、また、しばらくするとイエスを見るようになるとイエスは言う。
- ・ 弟子たちは、何のことを言われているのかわからず、お互いに論じ合っていた。
- ・ 最初のしばらくは、イエスが十字架につけられるまでの時間で、もう一つのしばらくは、そこからイエスが復活され、弟子たちところに現れるまでの時間のことである。
- ・ この最初のしばらくと次のしばらくの間に弟子たちが経験することは、「泣き、嘆き悲しむ」(20)、「激しい苦痛」(21)である。

◆ どんな嘆き悲しみだったのか？

- ・ 「嘆き悲しむ」と訳された言葉は、マグダラのマリヤがイースターの朝、お墓で悲しみのあまり憔悴仕切っている姿を描写する時にも使われている。絶望し、全くの希望も望めない精神的状態のこと。
- ・ 弟子たちは、いつそんな精神状態になっていたのか？

➤ それは、イエスの逮捕から始まっているように見えるが、彼らの心は既に揺らぎ始めていた。

ヨハネ 16:32 ああ、でも時が来れば、あなたがたはばらばらに散らされます。わたし一人を残して、見向きもせず、一目散に家に逃げ帰るのです。 いや、その時はもう来ています。

- ・ 弟子たちの嘆き悲しみは、恩師との死別という単純なものではなかった。それは、弟子たちが、自分たちの弱さをいやと言うほど思い知らされる時であった。自分の内側にあったもの、本当の自分が露呈され、その惨めさと

情けなさに打ちひしがれ、イエスを見るどころではなく、顔を上げることもできなくなっていた。

☆ あなたは、自分の惨めさに打ちのめされ、神に目を向けることさえできない精神状態になったことはないか？

参照：ルカ 18:13-14 一方、取税人は遠く離れて立ち、目を伏せ、悲しみのあまり胸をたたきながら、『神様。罪人の私をあわれんでください』と叫びました。よく言っておきますが、罪を赦されて帰ったのは、パリサイ人ではなく、この罪人のほうです。

◆ イエスが弟子たちにされたこと

- ・ 「わたしはもう一度あなたがたに会います」(22)：悲しみに包まれていた弟子たちに「またしばらくするわたしを見ます」と言われたが、実際は、イエスの方から弟子たちの方に会いに来られたのだった。
- ・ その現れ方は、裏切った弟子たちに復讐するのではなく、彼らを赦し、平安を与えるためだった。それにより、悔恨の念にさいなまれていた弟子たちの深い心の悲しみが、平安を与えられ大きな喜びに変えられていく。
- ・ 主イエスは、十字架につけられて殺され、世にも悲惨な死を味わわれた。この「死」は、まさに悲しみを支配する力、また憎しみと暗闇を支配する力。イエスが十字架で苦しみを受けて死なれた時、「全地が暗くなった」(マルコ 15:33)。それは、暗闇の力が支配した時であり、人々の心を悲しみに包み、憎しみが覆う時だった。しかし、主イエスは、死んで朽ち果てることなく、「しばらくすると」死を打ち破り、「いのち」へと復活した。
- ・ このように復活の主が弟子たちに現れてくださったのは、弟子たちがそのことを熱心に求めたからではない。彼らは全く期待していなかったにもかかわらず、主が彼らのところに現れてくださったのは、彼らの悲しみの深さを理解するイエスが、その悲しみを喜びに変えたいと願う、測り知れない大きな愛のゆえ。

◆ イエスが私たちにされること

- ・ 復活の主が現れてくださるのは、最初の弟子たちに対してだけのことではない。復活の主は、永遠に生きる方として、今私たちに一人一人にも同じようにしてくださる。弟子たちは、その心の責め苦を全て赦していただき、大いに「主を見て喜んだ」(ヨハネ 20:20)のように、私たちが復活の主を見て大いに喜ぶことができる。
- ・ この主に出会う時、悲しみ全て喜びに変わる。復活の主が、世に勝利した愛の光で私たちが包み、私たちの心を照らしてくださるから。
- ・ そして、「その喜びをあなたがたから奪い去るものはありません」(23)。それどころか、その喜びが満ち満ちたものとなるように、主は素晴らしい祈りの約束をくださっている。

ヨハネ 16:23b-24 まことに、まことに、あなたがたに告げます。あなたがたが父に求めることは何でも、父は、わたしの名によってそれをあなたがたにお与えになります。²⁴ あなたがたは今まで、何もわたしの名によって求めたことはありません。求めなさい。そうすれば受けるのです。それはあなたがたの喜びが満ち満ちたものとなるためです(22-23)。

- ・ ここで、「わたしの名によって」とは、〈復活の主イエスの臨在の中で〉、すなわち〈復活の主が共におられることを実感して〉という意味。「名は体を表す」というように、「イエスの名」は「イエスの体」。ですから、私のために復活してくださったイエスの臨在を確信して祈る度に、完全なる罪の赦しと、温かな愛の光が与えられ、悲しみは喜びに変わるどころか、「喜びが満ち満ちたものとなる」ことを日々新たに体験させられるのだ。

◆ まとめ

- ・ 自分の本性と直面させられ絶望したことはあるだろうか？その時、主はあなたにどうされたか？
- ・ 今抱えているあなたの闇は何か？主は、そこにどんな光を与えるだろうか？あなたはそれを信じるか？
- ・ では、今主があなたに会いに来られたら、あなたの悲しみを喜びに変えられるために何と言われだろうか？